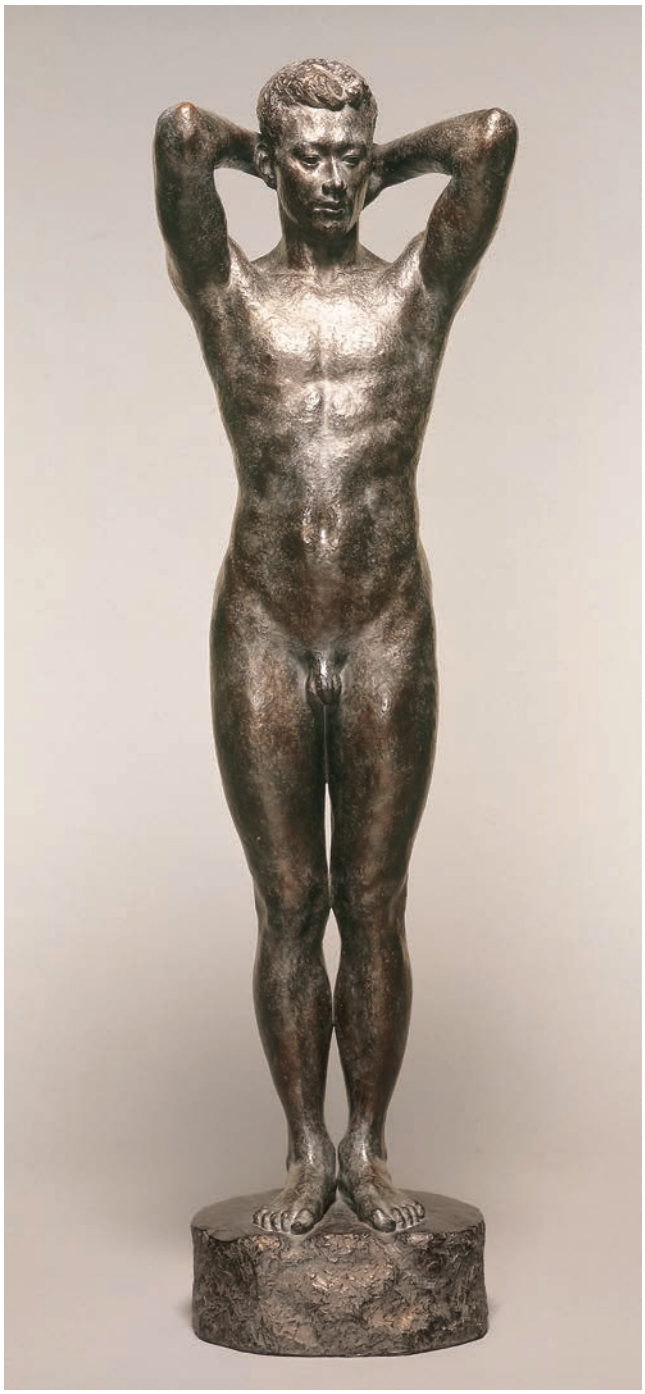
日展ニュース

No. 194　https://www.nitten.or.jp/　令和8年9月29日発行　編集兼発行人　神戸峰男

第119回 日展にむけて



思　考　　川崎普照

発行＝公益社団法人　日展　〒110-0002　東京都台東区上野桜木2-4-1　TEL03(3821)0453(年3回発行)

謹んでお見舞いを申し上げます

このたびの令和８年熊本地震並びに令和８年８月千葉豪雨により、犠牲になられた方には衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様方には心からお見舞い申し上げます。
皆様の安全と一日も早い復旧がなされますようお祈り申し上げます。

公益社団法人　日　展

「第一一九回日展を開催するにあたって」

日展理事長　宮　田　亮　平



この度第一一九回日展を迎えることはとても意義深いことと存じます。日展として日本文化を牽引するのは重要な役割であると意識しております。

いま世界を見てみますと、複雑な様相となっております。明日への希望の日々を送るには、やや暗雲を感じざるを得ません。そのような時こそ、文化芸術の世界が人々の心にともしびを、そして希望を与えてくれるものと思っております。日展はまさしくその役割を担うのではないでしょうか。

そしてこの第一一九回展から新たに「未央（みおう）賞」を設けることといたしました。この賞は未来に向けて大きな成長、大きな期待を感じられる応募作品をターゲットとしております。日展の役割の一つである人材育成の観点からも、この賞の新設は重要なことと感じております。

出品者一同、常に渾身の作品にすべく努力いたしております。どうか皆様の温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第119回日本美術展覧会実施内容

会　　期　令和8年10月30日（金）～令和8年11月22日（日）
観覧時間　午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで。）
休館日　11月4日（水）・10日（火）・17日（火）
入場料（税込）　○当日券　一　般　一、五〇〇円
○団体券（予約制）・前売券　一　般　一、二〇〇円
※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。
（ただし、入口で学生証のご提示をいただく場合がございます。）
高校・大学生は無料。
（入口で学生証のご提示をいただきます。）

会　　場　国立新美術館　東京都港区六本木七―二二―二



第119回日展　講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ

・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。
（入場無料　於国立新美術館 三階 講堂）※変更となる場合があります
※ 各日、講堂前にて整理券をお配りします。（30分前～）

開催日	講堂でのイベント
11月7日（土）	午後1時～2時30分（日本画）※途中10分休憩 映象による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 映像による作品解説 今年度審査員
	午後3時～4時30分（彫刻）※途中10分休憩 「彫刻表現の系譜 ― 歩みとこれから ―」 第1部　映像による作品解説 今年度特選作品を作者と審査員が解説 第2部　日展史アラカルト 「名作の数々は日展で生まれた」　他
11月14日（土）	午後1時30分～3時（書）※途中10分休憩 シンポジウム「日展の書」 中村伸夫 作品解説「書」 伊藤一翔・井上清雅・河西樸堂・田頭一舟・田中徹夫 吉田成美
11月21日（土）	午後1時～2時30分（洋画）※途中10分休憩 映像による作品解説 今年度審査員
	午後3時～4時30分（工芸美術）※途中10分休憩 映像による作品解説 「工芸美術の魅力」

「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品（彫刻一部の作品）に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

第一一九回日展　審査員・係

第一一九回　日展審査員　九五名

審査員長（理事長）宮田　亮平

第一科（日本画）審査員　一九名

（副理事長）土屋　禮一
（理　事）河村　源三
（会　員）平尾　秀明　菊池　治子
坂本　幸重　中出　信昭
長谷川雅也　長谷川喜久
岩田　壮平　佐藤　朱希
西田幸一郎　平木　孝志
森　美樹　山田　毅
（準会員）鵜飼　義丈　福田　浩之
山田　まほ
（外部審査員）
富山県水墨美術館長　桐井　昇子
姫路市立美術館 学芸統括　吉中　充代

第二科（洋画）審査員　一九名

（副理事長）佐藤　哲
（理　事）湯山　俊久
（会　員）小川　尊一　佐藤　祐治
池田　良則　大谷　喜男
片岡　世喜　浅見　文紀
小川　満章　茅野　吉孝
小牧　幹　河本　昭政
西田　陽二
（準会員）大木　基彰　春日　裕次
鷺　悦太郎　本山　二郎
（外部審査員）
足利市立美術館 学芸員　江尻　潔
神戸大学 教授　宮下規久朗
放送大学客員教授

第三科（彫刻）審査員　一九名

（副理事長）神戸　峰男
（理　事）勝野　眞言　山田　朝彦
（会　員）上田　久利　熊谷喜美子
谷口　淳一　宇津　孝志
紺谷　武　鈴木紹陶武
鈴木　徹男　田中　厚好
田丸　稔　寺山　三佳
一鍬田　徹
（準会員）坂本　健　永江　智尚
丸田多賀美
（外部審査員）
流通経済大学名誉教授
美術史学者　関根　秀一
和歌山県立近代美術館長
姫路市立美術館特任館長　不動　美里

第四科（工芸美術）審査員　一九名

（理　事）春山　文典　吉賀　將夫
（会　員）浅井　啓介　兼先　恵子
佐々木眞澄　高岡由美子
高名秀人光　谷口　勇三
友定　聖雄　本間　秀昭
待田　和宏
（準会員）加藤　丈尋　喜多　浩介
田中　貴司　谷口　信夫
手銭　吾郎　山口　和子
（外部審査員）
日本大学藝術学部客員教授
前 新潟県立万代島美術館長　藤田　裕彦
野口　玲一

第五科（書）審査員　一九名

（理　事）土橋　靖子　星　弘道
（会　員）伊藤　一翔　田頭　一舟
田中　徹夫　井上　清雅
大澤　城山　梶山　夏舟
河西　樸堂　近藤　浩乎
澤田　虚遊　歳森　芳樹
福光　幽石　森上　光月
吉田　成美
（準会員）豊原　睦子　真鍋　井蛙
（外部審査員）
皇居三の丸尚蔵館 調査・保存課長　高梨　真行
東京大学東洋文化研究所教授　塚本　麿充

第一一九回　日展《係》

（◎印―係主任）

第一科（日本画）

平尾秀明　菊池治子　坂本幸重
中出信昭　◎長谷川雅也　長谷川喜久
岩田壮平　佐藤朱希　西田幸一郎
平木孝志　森　美樹　山田　毅
鵜飼義丈　福田浩之　山田まほ

第二科（洋画）

小川尊一　佐藤祐治　池田良則
◎大谷喜男　片岡世喜　浅見文紀
小川満章　茅野吉孝　小牧　幹
河本昭政　西田陽二　大木基彰
春日裕次　鷺　悦太郎　本山二郎

第三科（彫刻）

◎勝野眞言　上田久利　熊谷喜美子
谷口淳一　宇津孝志　紺谷　武
鈴木紹陶武　鈴木徹男　田中厚好
田丸　稔　寺山三佳　一鍬田　徹
永江智尚　丸田多賀美

第四科（工芸美術）

兼先恵子　佐々木眞澄
高岡由美子　高名秀人光　谷口勇三
◎友定聖雄　本間秀昭　待田和宏
加藤丈尋　喜多浩介　田中貴司
谷口信夫　手銭吾郎　山口和子

第五科（書）

伊藤一翔　田頭一舟　田中徹夫
◎井上清雅　大澤城山　梶山夏舟
河西樸堂　近藤浩乎　澤田虚遊
歳森芳樹　福光幽石　森上光月
吉田成美　豊原睦子　真鍋井蛙

わくわくワークショップ

対　象　小・中学生とその保護者
（参加費無料・保護者は入場券を各自ご用意ください）

実施日程
11月1日・8日・15日（日曜日）
午前10時30分～日本画・洋画・書
午後2時～彫刻・工芸美術
※各教室約2時間

申込受付
ハガキかＦＡＸまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門（第2希望まで）を明記の上お申込み下さい。
申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。
（受付締切10／23必着）

受付人数　各教室10組（20名程度）
☆日展作家が直接指導します。
☆参加費無料

【お申込み・お問合せ】
〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局展覧会係
（TEL 03-3823-5701）
（Fax 03-3823-0453）
（E-mai event@nitten.or.jp）

第119回日展開催中のイベント

らくらく鑑賞会

―出品作家達とゆっくり日展を鑑賞したい方に―

開催日程　11月9日（月）・16日（月）
定　員　各回10～15名
参加費　1名　五、五〇〇円
（入場料、昼食、テキスト他）
時　間　10時30分集合、16時10分解散（昼食つき）
※日本画～書まで、各科の担当作家がご案内します。（主要作品のみ）
※予約制（詳細は事務局までお問い合わせ下さい）

ミニ解説会

《個人の方》
―一人だって参加したい！
出品作家のお話に耳を傾けてみませんか―

時　間　午後1時30分～（30分程度）
定　員　各部門20名（5部門）
※参加は無料ですが各自入場券をご用意下さい。
※予約制（当日受付あり）
※土・日・祝・初日を除く

●作品解説会

《サークルなどグループの方》
※予約制。事務局までご相談ください。
《学校行事、部活動など》
※予約制。事務局までご相談ください。

第119回日展行事日程（予定）

10月18日（日）午後3時
○入選者・特選受賞者等発表
（洋画・工芸美術）
10月19日（月）午後3時
○入選者・特選受賞者等発表
（書）
10月22日（木）午後3時
○入選者・特選受賞者等発表
（日本画・彫刻）
10月29日（木）
○出陳者内覧
○大臣賞等受賞者発表
○出陳者懇親会
第1科　ＫＫＲホテル東京
第2科　上野精養軒
第3科　リーガロイヤルホテル東京
第4科　東天紅
第5科　ザ・プリンスパークタワー東京
10月30日（金）
○第119回日展開会式
11月12日（木）
○第119回日展授賞式
（国立新美術館講堂）
11月22日（日）
○第119回日展閉会式

《第119回日展チケット情報》

前売ペアチケット
通常、一般一枚一、二〇〇円（当日一、五〇〇円）の前売券を、ペアでご購入の場合、二、二〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。
※前売コンピューターチケット・日展公式サイトのみ
トワイライトチケット
時間限定の入場券
観覧時間　午後4時～6時
一般一枚　七〇〇円
※学生（高校生・大学生）は無料。入口で学生証をご提示いただきます。
※会場窓口のみ販売

第119回日展前売券販売店のご案内
（10月1日より販売）
プレイガイド
チケットぴあ・ＣＮプレイガイド・ローソンチケット・ファミリーマート店内Famiポート他
デパート（友の会）
東武・丸広
カルチャーセンター
読売・日本テレビ文化センター・ヨークカルチャーセンター他
他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱います。
日展公式サイトでも販売しております。

特別寄稿

より親しまれる日展へ

加藤泰也

日展は明治四〇年（一九〇七）に文部省第一回美術展覧会（文展）として開催されて以来の長い歴史と伝統を誇り、まさに日本を代表する公募展であります。日本画家・山口蓬春も若い頃から作品発表の舞台とし、晩年は後に名立たる巨匠となる後進作家の成長と活躍を楽しみにしていた場です。蓬春先生の日記にも、自ら出品する作品の制作状況や理事会への出席など淡々としながらも頻繁に日展についての記述が見られます。昭和二七年（一九五二）一一月二日の日記には「日展を見物、大入袋出ずるの盛況なり」との記述があります。この一文だけでも蓬春先生の喜びが伝わってくるようです。

私は三年前に山口蓬春記念館の館長に着任。これまで芸術文化に関わる仕事や研究をしてきたわけではありませんが、振り返れば、高校時代に行った鎌倉近代美術館（現・神奈川県立近代美術館）や修学旅行で訪れた京都国立近代美術館で見た瑞々しい水滴の描き方の表現に感銘を受け、美術館に行くことが面白いと感じ始めたように思います。学生時代は日々のクラブ活動の合間を縫って、たまの休みに美術館や映画、小劇場や音楽のコンサートに行っては心身の疲れを癒し、社会人になってからは、休日に旅先や近隣にある美術館に行き芸術文化を楽しんでおりました。美術ファンではありましたが、お恥ずかしながら日展を鑑賞させて頂くようになったのは、現職に就いてからです。これまで関心は持ちつつも、正直、日展に観に行くなど、とても畏れ多い、どこか敷居の高い展覧会のように感じ、なかなか足が向きませんでした。しかしながら実際に観に行くと、作家の先生方が気さくに解説して頂いている時もあり、これまで少し構えすぎていたことに気づきました。日展の会場では、どの分野も若手の先生からベテランの先生まで見応えのある作品が並び、伝統技法を活かした作品から新たな視点や技法を取り入れた作品まで所狭しと展示され、ゆっくり鑑賞していると、とても一日では観ることのできない展示数に圧倒されますが、何度も観に行きたくなる空間です。

一方、出品された先生方が常に展覧会場にいるとは限りませんので、作者の着想やこだわりのポイント、苦労話などのコメントや受賞作品には審査のポイントについて、ＨＰ上やＱＲコードではなく展示作品の近くに気軽に読める文字情報として添えられていると、その場で鑑賞者に先生方の人柄、お考えや見るべきポイントが直接伝わり、作品を身近に感じ、より理解が深まるのではないかと思いました。芸術作品を見て、鑑賞者が自由に感じてくれればよく、コメントなど不要だろう?というご意見もあるかもしれませんが、ひとことが心に残ることもあります。例えば、ワインとアートは相性がよいと言われますが、ワインの世界も、飲んでコメントなど不要、美味しければよい！という方もいらっしゃる一方で、やはりどのような味がするのか、どんな方がどのような思いでどんな作り方で醸したワインなのかがわかると、親しみやすく、教養も物語も広がり、よりワインを楽しめるようになるのと同じように思います。

蓬春先生は明朗で気さくな人柄であったと伝わりますので、その雰囲気を受け継ぎ、当館でも日本画、山口蓬春作品の魅力を伝えられるよう、展覧会はもちろん、ＳＮＳでの発信、関連イベントの開催など幅広い方々に親しんで頂けるよう努めています。また、平明な解説文の表示と展示解説となるようこころがけており、「やはり説明があるとわかりやすい」と多くの鑑賞者に楽しんで頂けているようです。美術館という作品を調査研究する立場からすると、作者ご自身の言葉による日展出品作に関するコメントが残っていると、後世の学芸員・研究者にとってきわめて有意義なものになるはずです。

日展には日本を代表する公募展としての品格を保ちながら、より多くの方々に気軽に芸術文化に親しんで頂き、美術ファンの裾野が広がるような取組みを期待し、さらなる発展を願っております。





加藤　泰也（かとう　やすなり）
一九七二年神奈川県生まれ。京都大学法学部卒業。一九九七年東海旅客鉄道株式会社（ＪＲ東海）入社。駅や東海道新幹線での車掌、運転士の現場研修を経て、主に総務、人事、秘書など管理部門の業務に従事。現在、公益財団法人ＪＲ東海文化財団総務部長、山口蓬春記念館館長。（二〇二三年～現職）

第一一八回日展
安曇野展に流れているもの

清澤栄三

令和八年五月二日（土）より五月三十一日（日）にわたり、第一一八回日展 安曇野展を安曇野市美術館において開催させていただきました。安曇野市美術館での巡回展の開催は、令和四年以来四年ぶり（当時は安曇野市豊科近代美術館）二回目です。

信州安曇野の一番よい季節の五月に、日展巡回展の開催は、この上ない喜びでもありました。入館者数一一六七一人を得て、無事終了いたしました。この場をお借りし、関係の皆様に、厚く御礼を申し上げます。



安曇野市は、南北に長い松本盆地にあり、長野県のほぼ中央に位置しています。平成一七年（二〇〇五年）一〇月一日に、当時の南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・東筑摩郡明科町の五町村が合併し安曇野市となりました。人口は、令和八年五月一日現在、九万五千百七十九人。工業出荷額は県内五位、米の生産量は県内一位、豊富な湧水を利用した山葵栽培が行われる田園都市です。

第一一八回日展の巡回展は、京都、名古屋、大阪、安曇野、金沢と巡回しましたが、安曇野以外は、大都市であり県庁所在地での開催です。人口の少ない地方都市での開催は、あまり例のないことだと思いますし、開催する安曇野市美術館の規模も小さく、学芸員も少人数です。手作り感あふれる巡回展となりました。

今、前回、令和四年の開催にあたり、「日展の巡回展を誘致しよう」と早くから動き始めた（公財）安曇野文化財団や当時の安曇野市豊科近代美術館の先輩方や近隣の日展会員の皆さんの思いに熱さを感じています。また、誘致の文化的な意義に共感し、後押ししてくださった市長はじめ行政の方々や地域の方々にも同様に芸術への熱い思いを感じます。

私ごとになりますが、芸術への思いと言えば、明治三十五年生まれの私の祖父が小学生の私に碌山美術館の建設にあたり寄付をした話をしてくれたことを思い出します。

明治四十三年の荻原碌山の急逝後、穂高出身の新宿中村屋の相馬家や碌山の兄弟・親族らによって保存・公開されてきた作品の寄贈を前に、出身地の穂高町、南安曇教育会を中心に財団法人碌山美術館設立委員会が組織され、建設資金の寄附募集が行われました。そして、昭和三十三年（一九五八年）四月二十二日、碌山美術館が開館しています。建設に際して、意義に賛同しわずかではあるが寄付をしたということがきっと祖父の誇りであり、文化的価値を感じて寄付に多くの家が参加したという地域の誇りでもあったのです。

その後、今から二十年ほど前、私は、南安曇教育会の幹事として、教育会創立一〇〇周年記念事業の一つである碌山の石膏像のブロンズ化の準備に携わっていました。南安曇教育会所有の『女』（ナンバリング有）を委託保管していただいていた碌山美術館から、南安曇教育文化会館へ鋳造業者への引き渡しのため運ぶ機会がありました。毛布にくるまれた『女』の石膏像を先輩の車の後部座席で抱き、「お前はどうなってもよいから、絶対に像をぶつけるなよ」と先輩に言われ、緊張して抱いていました。その時、「いま、碌山の石膏像『女』を自分は抱いている。その心持ちは、祖父や安曇野の人たちが、郷土の芸術文化に触れ大事にしようしていたことと姿は違うが、同じ心持ちかもしれない」とふと思ったのを覚えています。

第一一八回日展 安曇野展においでいただいた方々の作品を鑑賞の様子を拝見しお話をお聞きしてみると、たくさんの方が作品によさを見つけ、それに寄り添おうとしているように私には思えました。それは、安曇野の地だからなのか、安曇野の血だからなのか。

当館で、第一一八回日展 安曇野展を開催させていただき、かけがえのない多くの財産を得ることが出来ました。これからもそれらを活かしてまいります。

清澤　栄三（きよさわ　えいぞう）



一九五八年長野県南安曇郡堀金村に生まれる。信州大学教育学部卒業。県内中学校の美術教師として勤務し、上越教育大学大学院に現職内地留学。教育学修士。その後、再び県内中学校に勤務し、長野県教育委員会、安曇野市教育委員会、県内中学校の管理職勤務を経て定年退職。退職後、安曇野市教育委員会に再度勤務。現在、安曇野市美術館館長

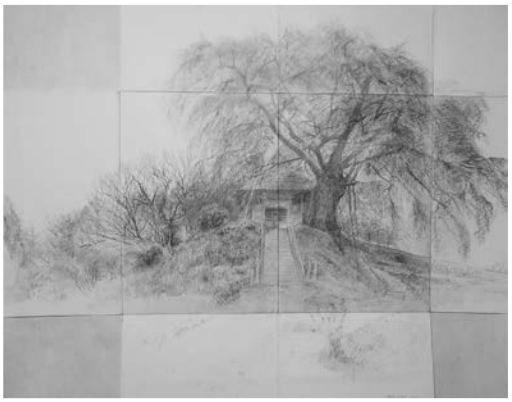
第一一九回日展　各科審査員より

第一一九回日展 審査にあたって

長谷川雅也（第一科　会員・審査員）

物心付く頃から毎日の様に絵を描き工作し、物作りが好きでした。

親族にその様な者がおらず、唯一私だけ何故作り続けるのか不思議に思う事があります。美大以外考えず、絵肌の相性からか迷わず日本画の道を選び今に至ります。



私には未知の世界ながら先生方のご指導ご縁もあり、手探り迷走を続ける日々の中で、日展さらに今は少なくなった画塾に身を置いている事で大きな影響を受けたかと思います。

年の頃もあり重責を賜る事が多くなり、先人の先生方の偉大さを日々実感し、気付いていなかった多くのご配慮の多さに驚き、感謝の気持ちでおります。

来年、一二〇回記念展を迎えるにあたり前年の今期から少しでも良き展示になるように、審査では出品作の一作一作に真摯に向き合い日展のこれからに尽力して参ります。

目には見えないもの

西田幸一郎（第一科　会員・審査員）

目に見えていなくても、私たちはいろいろな感覚の中で生きています。

例えば、暑い日が続いている頃、朝に外の空気がひんやり感じられると、ちょっとうれしくなったりします。例えば、久しぶりに蚊取り線香の香りをかいだとき、何かを思い出したような気がして少しせつなくなったり。

例えば、窓の外で聞こえる鳩の羽音。石油ストーブのにおいとその温もり。冷たい水を一気に飲んだときのその喉ごし。そういうものに日々、心が動かされます。

わたしが携わっている絵画には、目に見えるものの要素しかありません。しかし、その平面の中に、いろんな感覚を呼び起こさせるような作品に出会うと、どきっとします。それは具体的なものではありません。目には見えないものなのだと思います。

今回、審査をさせていただくに当たり、すべての作品が、作者のたくさんの時間と命をけずって生み出されていることを十分に承知し、真剣に向き合う覚悟でおります。そして、その中に、見えているもの以上の価値を見つけ出すよう努めて参りたいと思います。



風の面影

山田まほ（第一科　準会員・審査員）



〝音を聴くこと〟スケッチ道具を手に滝の前に立つ時、草いきれの中から遠く空を見上げる時、大切な先生の言葉は常に心にあります。そうしてそれは湧きあがる雲の輝きや、なつかしい雨の感触を孕む風を実感し、心に沈め、やがて立ち顕れるその面影をしっかり聴きとり画面にむかう事でもあると考えています。また日本画の絵具は素材である前に、それ以前の様々なものであった記憶を含んでおり、そこからも顕れる形があるようにも思えます。

この度は、出品される多くの作品により、自身が審査をうける貴重な機会を与えられました事を心して臨む所存でおります。

第一一九回　日展審査にあたって

茅野吉孝（第二科　会員・審査員）



この度、二回目となる日展の審査員を拝命し、光栄に思うと同時に、その責任の重さを感じております。

日展は輝かしい歴史と伝統を重ね、先師・先輩方の築いてこられた心を大切に受け継ぎ、今年で第一一九回を迎えます。時代が変化する中にあっても、その伝統を大切にし、文化・芸術を次の世代へつないでいくことが大切であると感じております。

次世代を担う作家の方々にも日展に魅力を感じていただき、意欲を持って作品を寄せていただくことが、この素晴らしい伝統を次の世代へつないでいくことにもつながるのではないかと思います。

審査にあたっては、一点一点に込められた作者の思いを尊重し、公正かつ公平に作品に向き合いたいと思います。日展にふさわしい作品を選ぶという責務を心に留め、審査員として誠実にその任を全うしたいと存じます。

競作について

西田陽一（第二科　会員・審査員）

公募展としての日展の大きな魅力の一つとして厳しい審査の結果の落選・入選・受賞があり、展示された作品を沢山の方々に鑑賞されながら技術力や芸術性を高め合い・競い合う〈競作〉にあると思います。

毎年開催される日展の様な厳しい〈競作〉の中で、それぞれを高めていくことが価値のあることだと思っています。出品者にとって落選・入選・受賞の結果だけではなく、終わりのない〈競作〉を生涯続けることが重要だと考えています。

審査員は、多くの想いのある作品を厳正に客観的な判断をしなければならない責任のある立場だと自覚しております。一方で私も自分の作品を出展するに当たっては、多くの鑑賞者の方々の審査を受けるつもりで、今年も〈競作〉に全力で臨んでまいります。



日展審査員の委嘱を受けて

春日裕次（第二科　準会員・審査員）



幼い頃、人見知りがひどく、ほとんど家から出ない私にとって、唯一の楽しみは絵を描くことでした。見かねた母親に連れられ、近所の画家さんの教室へ。そこで初めて目にした一〇〇号の油絵の迫力に心を奪われたことが、私の絵画人生の始まりだった気がします。

高校時代には、恩師が美術準備室で制作される姿を見つめ、その作品の出品先である日展に憧れを抱きました。大学卒業後、高校美術教員として働く傍ら日展に挑戦しましたが、幾度も落選。初めて入選した時の感動は、今も忘れることができません。

このたび第一一九回日展審査員を拝命し、これまでお世話になった先生方、先輩方のお顔が目に浮かび、身の引き締まる思いです。作品一つひとつに込められた思いを受け止め、責任を持って真摯に審査に臨みます。出品される皆様には、早くから計画的に制作に取り組み、精魂込めた渾身の作品を期待しております。

感動する心

谷口淳一（第三科　会員・審査員）



酷暑の八月、七〇代半ばの親しい友人から槍ヶ岳登頂の一本の動画が届きました。映像には決して平坦でない険しい岩場を越えて無心に登り続ける姿がありました。頂上に立った時の友人の顔は達成感に満ち溢れていて感動しました。

この動画は私の心を揺り動かし新たな制作へと導いてくれました。制作は試行錯誤の連続でなかなか思うように進まないものです。完成が見えない不安な日々が続きます。何度もやり直し作品と向き合っていくと、自分のイメージする形が見え始めてきます。その時は口では言い表せない感情が湧いてきます。これが土をこね自分の手でつくる彫刻の魅力の一つだと思います。このような創造的な仕事ができる喜びを大事にしたいものです。

今回、日展の審査員を拝命致しました。作者が苦労して制作した作品を通して何を伝えたいか、作品の奥にある努力や可能性を見極める眼を大切に審査に臨みたいと思っております。

一一九番目の彫刻展示

一鍬田　徹（第三科　会員・審査員）

今年一一九回目を迎える日展は、その歴史の中で、これまで数えきれない程の彫刻作品が会場に並べられてきたことでしょう。私はそのほんの一部しか実見できていませんが、例えば、ロダンから強く影響を受けた彫刻家・荻原守衛（一八七九―一九一〇）の『女』が第四回文展に展示された明治の頃から、令和の今日に至るまで、紆余曲折を経ながらも、この日展第三科彫刻が多くの先人たちの努力によって紡がれ、継続してきたことは疑いようもない事実です。これは、様々な価値観が認められるようになった今の時代においても、確かな安定感と重みを内外に示していることに他なりません。

日展のポスターが街中に溢れる日本の秋、新しい作品との出会いを求めて、展覧会場に足を運んでくださる鑑賞者の皆様に、今の日展第三科彫刻からどんな提案ができるのか、今回の審査には、そういった大きな課題と責任があると感じています。



第一一九回日展　新審査員を拝命して

丸田多賀美（第三科　準会員・審査員）



十代の頃、どうせ勉強するなら、と美術科がある高校を受験しました。そこで出会った担任の先生は日展作家で、夏休みに先生のアトリエで出品作品の石膏取りの経験をさせて頂き、お手伝いとは名ばかりの足手まといでした。先生が真剣に作品に向き合う姿勢や、美術部員仲間と初めての体験に悪戦苦闘した思い出が鮮烈でした。自分でも制作してみて、彫刻は上手くはできないが楽しいと感じました。

大学に進学し、同じく日展に挑戦する指導教官の先生や先輩方を見て、自分程度ではとても無理だと思っていましたが、高校時代の恩師から「出品することは面白いし、勉強になるよ！」と仰って頂き、実際に入選して会場に足を運ぶと、自分の作品の練り上げの足りなさや、他の作家さんの鮮やかな感性が作品から見て取れて、本当にもの凄く刺激になりました。

以来、日展で育てて頂いた自分が今回、審査員としての任を賜りました。その名に恥じぬ働きができるよう、誠実に向き合う所存です。

第一一九回日展　審査に当たって

佐々木眞澄（第四科　会員・審査員）



工芸美術は、新たな魅力を紡ぎ出す重層構造の多種多様なジャンルに凝縮された表象作品として、その不可欠な基盤である平面と三次元の立体的な造形作品の表現です。

基本的な構造の文脈は、作家思想の高遠な哲理と造形表現の定義である主題的な基本構想が主体で、具象・半具象・抽象などの心理的な描写に美意識の基層という感覚的な魅力を紡ぎ出す構造・形状・色彩感情・色彩配色・形態などの変容に、精巧な技術・技巧・オブジェ加工の技術的な要素の核心を占めるコンポジションの比重の分配を作家の観念的な表現という核心の定義に基づいて統合させています。

さらに同居する巧妙な精神波紋の韻律を創りだすメッセージの結晶というものを誘惑に結びつけて静寂な雰囲気のあの日展の会場空間で、求心的な表象の世界へと心象の語りを投影させています。

作家の制作思想に身を浸し、鑑賞者の心の琴線に触発される作品に真摯な見識で審査に努めたいと思っています。

癖も魅力な人達

谷口勇三（第四科　会員・審査員）

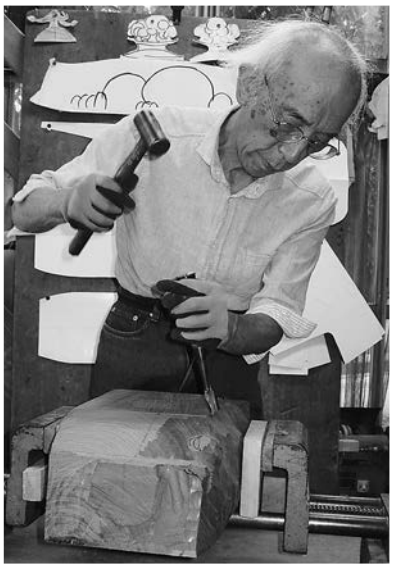
日展に出品して四〇年弱になります。続けられている一番の要因は、作品同士の切磋琢磨は当然ですが、日展に係わる個性的で魅力的な人達との出合いに惹かれてだと思います。作品は技術、知識、キャリアだけでは追い続けられません。常に息づかせ進化させていくには、腕指を指示決定させている感性脳状態を育む環境が必要です。それは誰にでもある日常に潜んでいます。立ち戻れない時に、好奇心を持って過ごせるか？が課題です。

今、地球上に約八三億人が生活しております。八三億の個性八三億の価値感等です。この「多様と違い」の人種の可能性は、工芸の目指す本質と、「創造」という共通言語を通して、交流、流布する事が出来れば、他の何よりも、人を豊かにするツールになると思います。創作は誰にとっても「命」です。真摯に真剣に丁寧に拝見させて頂きます。



審査にあたり思い出すこと、思うこと

谷口信夫（第四科　準会員・審査員）



中学二年生の時「将来なりたい自分は？」のアンケートに「日展作家」と書いていた。

その頃ある地方新聞は秋になると日展の記事が華々しく報道されていた。それが日展への憧れが大きく芽生えるきっかけだった。

私は約二五〇年の歴史を有する井波彫刻士の二代目として生まれ育った。後継ぎをしながら、受注生産の仕事だけではなく、自分で創作した作品を将来日展に出品するのだと決意した。

それから約六五年後、その頃の夢のような出来事、この度の第一一九回日展の審査員という大役を拝命し、光栄であると同時にその責任の重大さに身の引き締まる思いです。

工芸は平面と立体、素材の多様性、数々の技法等、多岐にわたり違いが有ります。

難しいが、かえってそれが面白いのが工芸だと思います。

審査にあたり自分自身の美意識と感性を信じ、出品された作品と真摯に向き合い、作品の声を聴きたいと思います。

墨氣

井上清雅（第五科　会員・審査員）

この度、三回目となる日展審査員を拝命いたし、身の引き締まる思いでいっぱいです。自身の作品制作と向き合う中、審査員としての重責を思うと、緊張感が日に日に増してきています。

日展に作品を出品するようになり、五十年が過ぎました。振り返れば、学書の奥深さを常に感じながら、書学・書法の研究と鍛錬に明け暮れた歳月であったように思います。その歩みの中で、多くの人と古典との出会いに学び、自らの書を問い続けてまいりました。

書作品の様式美、文字の造形美、線質の深み、墨の氣、要白・線際の響き等、様々な観点が融合した作品を目指しております。書への探究に終わりはなく、今なお新たな表現を求め、日々研鑽を重ねております。

日展に出品される作品は、それぞれの作家が一年間研鑽を重ねて生み出した集大成ともいえる大切な一点です。自らの作品制作を通して感性を最大限に高め、作品に込められた思いを受け止めながら、審査に臨みたいと思っております。



第一一九回日展審査員を拝命して

森上光月（第五科　会員・審査員）

歳月の流れは早いもので、日展初入選の栄を賜ってから、はや三四年の月日を重ねて参りました。さまざまな書道展の中でも日展だけは特別な存在であり、その輝きは益々増すばかりです。

次回はどんな作品を書こうかとの思いは、日展閉会直後から既に始まっており、審査員という立場でのそれは一層の重圧ではありますが、ただ最近は結果に一喜一憂していた時代から、自分自身を投影した作品を発表できる幸せを感じているのも事実であり、全てにおいて本当に楽しみな展覧会となっております。

日々研鑽を積んだ仲間が、己の全てをかけて書き上げた作品を審査させていただくに際し、私自身が常に謙虚で真摯な姿勢を保ち、諸先輩の先生方から多くの事を学ぶことこそが、審査員としての私の務めと考え、出品者の方々への敬意を忘れず、書の魅力を発信して参る所存です。



憧れは、今も

真鍋井蛙（第五科　準会員・審査員）

学生の頃から日展に応募し続けてきました。届くのは落選の知らせばかりで、それでも一生に一度でいいから入選したい、その一心で石に向かい、筆を執ってきたように思います。

初入選の通知が届いた日のことは、今もはっきりと覚えています。封筒を握りしめたまま身体の震えが止まらず、しばらくその場を動けませんでした。あの広い会場の陳列ケースに、自分の作品が飾られる。初日、ケース越しに自作と向き合ったときの嬉しさは、今も忘れられません。

このたび、第一一九回日展におきまして審査員を拝命いたしました。あの日の震えを、今度は誰かに手渡す側に立つ。そう思いますと、あらためて背筋の伸びる思いがいたします。

出品される一点一点の向こうには、必ずあの日の私と同じ思いがあるはずです。その重みを忘れることなく、初心のまま、まっすぐに作品と向き合ってまいります。日展に寄せられる皆さまのご期待に応えられますよう、精一杯務めてまいりたいと存じます。



～夏休み一日ART体験～
第21回 Oneday Art（ワンデイアート）－レポート－

今年も連日の猛暑の中、日展会館のイベントスペースで、「第21回Ｏｎｅｄａｙ　Ａｒｔ」が開催されました。

今年は初めて実施するプログラムもあり、大人と子供、あわせて１９７名の方が参加してくださいました。作品展もたくさんの作品が並び、スポットライトを受けて輝く自分の作品に、驚きと喜びの参加者の表情が印象的でした。

作品展の様子は公式サイト（こども日展ページ）で公開し、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

《指導作家》

7月19日　彫刻

吉岡　徹　寺山三佳　廣川政和
堀内有子　鈴木紹陶武
安田陽子
（オブザーバー）山田朝彦
（サポート）境野里香　宮地淑江
音羽久美子

7月20日　日本画

亀山祐介　川田恭子　能島浜江
岩田壮平
（サポート）新川美湖　安田敦夫

7月26日　工芸美術（革）

山崎輝子　高岡由美子
田中かの子　中村茂子
（オブザーバー）繁昌孝二
（サポート）川口　満　安藤タヅ子
出居麻美　大川雅代

8月1日　洋画

桑原富一　片岡世喜　菊池元男
佐藤祐治　田中里奈　田辺知治
前田　潤　茅野吉孝　小林理恵
（オブザーバー）佐藤　哲
（サポート）桐生義也

8月2日　書

井上清雅　綿引滔天　植松龍祥
岩井秀樹
（オブザーバー）髙木聖雨
（サポート）尾花太虚　角田大壌
滑田燿齋　松浦龍坡　秋山彩華
増川雪子　斎藤真澄

【ご協力いただきました】

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株式会社ケーエス、株式会社光雲堂、株式会社東海丸二陶芸、株式会社平助筆復古堂、株式会社墨運堂、東洋額装株式会社



賛助会員制度 《日展パートナーズ》

日展では平成29年より、日展の公益事業活動に賛同し、財政的にサポートしてくださる方々を対象とした賛助会員制度「日展パートナーズ」を設け、運用いたしております。

令和8年8月末現在のご加入者は左記の通り（掲載希望者のみ）。

●個人

東　晋一郎　様　　飯田真未　様
井谷善恵　様　　井上道守　様
今田功一　様　　今村忠司　様
梅﨑　壽　様　　角井　博　様
兼重勇希　様　　栗原直子　様
呉　祐輔　様　　黒田浩平　様
児玉安司　様　　近藤禎男　様
坂本美賀子　様　　佐川かおる　様
澤井和行　様　　髙木和美　様
髙木寛史　様　　田頭明子　様
田頭益美　様　　髙橋千笑　様
竹尾明子　様　　竹本葉子　様
田中宏欣　様　　土屋礼央　様
寺岡宏高　様　　中室里恵　様
西　康宏　様　　西田俊通　様
西村潤帰　様　　西村友子　様
野田裕一　様　　藤田理恵子　様
藤本真之　様　　堀　稲子　様
宮島幸男　様　　村里　暁　様
森嶌順子　様

●法人・団体

株式会社　ＩＤホールディングス　様
株式会社　大垣共立銀行　様
岡崎信用金庫　様
株式会社　玉蘭堂　様
謙慎書道会　様
一般社団法人　光風会　様
公益社団法人　創玄書道会　様
株式会社　高山草月堂　様
株式会社　筑波銀行　様
T&Tパートナーズ法律事務所　様
一般社団法人　東光会　様
東洋額装　株式会社　様
公益社団法人　日本書芸院　様
ニューカラー写真印刷　株式会社　様
株式会社　原汲古堂　様
一般財団法人　ビオトピア財団　様
福井素鳳堂　様
有限会社　みなせ筆本舗　様
一般財団法人　桃園学園　様
株式会社　谷中田美術　様
菱三印刷　株式会社　様
株式会社　和光　様

作家人生―私の仕事―





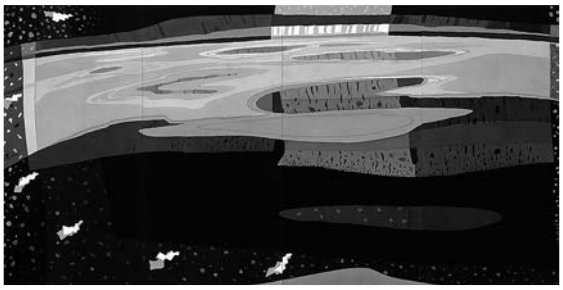
≪日・月≫
（令和３年 第８回日展出品作）



≪残夏一日≫
（令和５年 第10回日展出品作）



≪竹生島≫（平成７年 第５回染・清流展出品作）



≪雨乞池≫（平成11年 第９回染・清流展出品作）

制作について

第四科工芸美術 会員 井隼慶人

現在の世相とは異なり、私の子供時代は自然と接する機会に恵まれていました。加齢の功徳かと思いますが、今改めて自然の美しさ、不思議さ、豊かさをより多く知る感動を得、これ等の事が私の制作発露となっています。

染色技法による表現の原点は私が京都市立美術大学工芸科で受けた最初の型染授業です。染色最終工程で和紙に置かれた防染糊が水中に溶け落ち、作意した図が浮かび表われる有り様が大変印象的で、感動を覚えました。それ以来制約を受けながらも素材や技法を考慮し、間接的に想いを表わす表現方法の面白さを知る事となりました。同時に、染色研究室の先生方の染色表現への思索や表現方法への試み等に大きな刺激を受け、創作の菌糸が私に植え込まれたものと思います。その後生涯をかける仕事に関われる幸運を得る事が出来たのは、日展での発表の場です。先達の先生方の作品は無論、他部門の作家の仕事、或いは近辺の工芸作家の存在により、大きな刺激が得られる事に感謝の念を持っています。

制作に当たっては写生が基となります。時間をかけて対象の美を受け取りますが、その対象を異なる時間に写す事で美の変化を知ります。創作上、最も腐心する事は、平面上での空間処理に時間と空間を越えるような表現を願い、主題の異なる次元の美を同一画面に忍ばせる事で、それを暗示する方法を考慮します。これは限られた時間の中に存在する自身の確認行為かも知れません。実制作に於いて留意する事は布の平面性と染料の鮮明性で、これ等の条件は表現上、制約であると共に利点ともなります。この事を踏まえ、主題に付随する不必要の省略を行うと共に、対象の模様化を心掛け、余裕と遊び心を持って、図柄や色彩を強調したり、変形を行ったりしています。

如何にこの上ない自然の美を捉え表わすかを思索し自己を表わして来たつもりですが、近年、表現する事とはこれ等以外に何かがあるのではないか、と考えます。それが何であるか不明ですが、今後もそれを探りながら制作を続けたく思っています。



≪碧濤≫（平成29年 改組 新 第４回日展出品作）文部科学大臣賞



≪龍鶴・劉永之≫
（令和６年 現代書道20人展出品作）



昭和二十五年頃 正伝永源院の庭にて
右：真神巍堂（仁宏）本人
左：陶芸家 永樂而全師 千家十職



無くて七癖

第五科書 理事 真神巍堂

元来飽き性で子供のころから何をやっても長続きしない私が、八十三歳になる今でも書を続けていることが不思議です。

教育に対しては随分寛大であった父は習い事にはダメといったことはなく、貧乏寺の住職であっても許してくれました。昭和十八年生まれで、習い事などは終戦後それほど今のように多岐にわたってはおりませんでしたが、柔道・空手・そろばん等は結構盛んでした。しかし、それらも、ものの一年も経たない間に辞めてしまいました。ただ、書道だけが続いたのは特別な理由がありました。一つ目は、習った先生が、私の通う小学校の前にあった、禅居庵という京最古の禅寺建仁寺の塔頭（たっちゅう）の住職であったからです。同じ塔頭の住職であった父とは同年代の友人であったため、辞めたいと言いづらかったのです。二つ目は、私が小学校六年生頃には、建仁寺僧侶として得度をしていたことです。

その二つの理由とは別に、私には変な癖があったのも今まで書を続けている理由かもしれません。白い紙を見ると無性に文字を書きたくなるのです。何も半紙や画箋紙などの立派なものでなくてもお菓子の包み紙の裏でも片っ端に文字を書きたいのです。主には無意味な漢字が多いです。教員のとき、会議のノートも肝心の会議のページはほとんど何も書いておらず、裏から始まるページには誰かの発言のなかの断片的な言葉が余白がないほどに書かれています。これは、八十三歳になった今でもまったく変わりません。父に聞くと祖父も同じような癖があったようです。私の三人の孫は絵が一番好きな遊びのようです。考えてみますと、母方の両親は、日本画家です。血がそうするのでしょうか。「好きこそものの上手なれ」という諺がありますが、上手下手は別にして結局は書が根っから好きなのでしょう。今でも書のことが頭から離れたことは一時もありません。眠れない夜でも何かの妙案が頭にうかぶと朝を待たず筆を持ちたくなります。

「未央（みおう）賞」新設

第一一九回日展より、特選のほか、一般入選作品を対象とした賞として、今後の成長や将来性を重視して選考する「未央賞」（各科五点以内）を新たに設けることといたしました。

「未央」という言葉には、「尽きることがない」という意味があり、芸術の喜びや楽しみが末長く続き、さらに成長していく期待を表しています。

刊行物のご案内

第一一九回日展作品集

○定価　三、五〇〇円（税込）
○令和8年10月30日発行予定
○五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
○作家名・作品題名の英訳（巻末）
○別冊　作家本人による作品解説、釈文（書）
○諸資料
○A4判変型
○オールカラー　約一五〇頁
○表紙　河村源三・湯山俊久・神戸峰男・森野泰明・井茂圭洞（出品作・予定）

第一一九回日展図録（五部門五分冊）

○定価　各三、五〇〇円（税込）
○令和8年11月5日発行予定
○東京会場の全陳列作品図版・目録を収録（作家名・作品題名の読み仮名・英訳付）
○全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
○審査所感、授賞理由ほか諸資料
○A4判変型

第一科『日展の日本画』
オールカラー　約七〇頁
表紙　河村源三（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』
オールカラー　約一四〇頁
表紙　湯山俊久（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』
オールカラー　約五〇頁
表紙　神戸峰男（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』
オールカラー　約一二〇頁
表紙　森野泰明（出品作・予定）

第五科『日展の書』
全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般入選はモノクロ　約二二〇頁
表紙　井茂圭洞（出品作・予定）

日展作品集・図録（バックナンバー）

○割引価格　各一、〇〇〇円（税込）
※在庫が僅少の回もございますので、お問い合わせください。
（問い合わせ先）
〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
公益社団法人日展　出版物係
電話　03（3821）9543

表紙
「思　考」
一九八九年（平成元年）
第二十一回日展
190×52×42cm
川崎普照
（一九三一～二〇二四）

日展会館（本館）利用案内

日展会館（本館）の貸しスペースはギャラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展　施設管理係
電話　03（3821）0453

編集後記

世界各地で猛暑や豪雨が頻発しており、森林伐採、核問題等の人類のエゴに対する大自然の怒りのように感じていらっしゃる方も多いと思われます。

本号では加藤泰也、清澤栄三の両先生には、お忙しい中ご寄稿いただきましたこと紙面を借りてお礼申し上げます。

「作家人生―私の仕事―」は工芸美術、書の先生方に芸術を志したきっかけや制作姿勢など、貴重なお話を執筆していただき、また各科三名の審査員からは、審査に対しての力強い思いが伝わってきました。

出品者の皆様は、作品制作に大詰めを迎えていることと存じます。会場に足を運んでくださる方の、心に響く作品で埋め尽くされた「第一一九回日展」となることを祈念しております。

（野原）

編集委員　亀山　祐介　西田　眞人
浅見　文紀　松野　行
野原　昌代　堀内　秀雄
上原　利丸　古瀬　政弘
歳森　芳樹　山本　大悦